

アスペルガー症候群の早期発見の研究
A study for early detection of Asperger syndrome

1K06A175-6 富岡 泉

指導教員 主査 吉永 武史先生 副査 友添 秀則先生

【目的】

大学生になってから接する人間の幅が広がったことで様々なタイプの人と接する機会が増えた。そのなかには、「空気が読めない」タイプの人何人かいた。彼らは、何度か会って話をしても、他の人と比べてみて特筆するほどの奇異さは見あたらない、もしくは個人的で表現できる程度であった。しかし、長時間しゃべっていると、実は言葉のキャッチボールが成立していない。あるいは、突然その場の雰囲気反した発言が印象的であった。彼らを空気の読めない人として切り捨ててしまうことは簡単であるが、もしもアスペルガー症候群という発達障害を持った人々であった場合には、専門家の所へ行き、正しい対応をする必要がある。そのためには、まずアスペルガー症候群である人と、そうでない人とを認識しなければならない。

本研究では、なるべく早い段階（8-10歳の学童期）でアスペルガー症候群を発見するためには、何が必要かを考える。そのために、研究の対象を子どもに定める。さらに、「空気が読めない」人のなかにアスペルガー症候群の人がいたとして、彼らはなぜ発見されずに、今まで過ごして来てしまったのかを探っていくことを目的とする。

【方法】

アスペルガー症候群に関する文献研究である。主に、児童心理学ならびに教育心理学に関する資料に基づきながら研究を進めていく。そのなかから、未だに明確な規定の存在しないアスペルガー症候群の定義を探っていく。なお、子どもの実態に関するデータについては、文部科学省のホームページに掲載されている情報も参考にした。

【結果】

アスペルガー症候群は、他の発達障害と合併して発症するケースが非常に多い。様々な症状を確認することはできるが、診断基準には不安な要素もあり、定義を一つに絞ることは不可能であった。そのため、アスペルガー症候群の症状を認識するために、専門家以外

（主に教師や親）でも扱えるチェックリストを作成した。そして、それを具体的な症例に当てはめて、リストの活用性の有無を確認した。次に実際の教育現場にアスペルガー症候群の子どもがいた場合に起こり得る様々な状況を挙げ、チェックリストでの対応が確認できた。

日本においてアスペルガー症候群の多くが見逃されている原因には、国内での知名度が高まってきたのが近年になってからであったことが挙げられる。また学校教育現場における、「モンスター・ペアレンツ、プライバシーの侵害」によって、アスペルガー症候群の子どもたちの異常性が「個性」として誤った認識をされている。さらに、教師の抱える問題として、彼らの働く環境がパターンリズムによって管理されていることも、アスペルガー症候群の発見を見逃す一因となっている。

【考察】

最も発見しやすい時期にアスペルガー症候群の見逃しを防ぐためには、教師自身がアスペルガー症候群の正しい知識を持っていないといけない。正しい知識を持った上でのアスペルガー症候群チェックリストの使用は、非常に効果的であると考えられる。また、子どもの親にもアスペルガー症候群の知識を持ってもらい、各家庭にアスペルガー症候群チェックリストを配布することで、家での症状の確認もできるようになり、より二十四時間に近い体制で、子どもを観察することができるようになる。

アスペルガー症候群の発見には、親と教師との優良な関係大切である。そのために、教師は自分と子どもと家庭の情報交換がスムーズにいくように、万全なコミュニケーション体制を作り上げる必要がある。

本研究において、アスペルガー症候群チェックリストの活用性は確認できた。しかし、今後の社会の変化に対応するためには、さらなる項目の改定が必要となる可能性がある。また、チェックリストの臨床現場での使用結果は、今後の研究結果を待つ必要がある。